

ボーイスカウト活動

会社を離れ、自分の活動する場としてボーイスカウトに参加して来た。小さい頃から外で遊ぶことが好きであったことと、何でも揃う今日と違い自分の知恵と工夫で生活をしなければならなかった時代の名残りとして、何か次世代の子供に残せるものがあるのなら、と子供に積極的に接することを思いついたからだ。スカウト活動を通じて子供とのふれあいは勿論、地域とのつながりをもつことができるようになったし、また、なによりも、会社以外の場での自分の存在を確認できたことは何にも増して得難いものであった。ボーイスカウトについての全容を語ることは非常に大変な作業であるし、また、それだけの深い拘わりをもった分けではないのでその任に耐えないが、現場の指導者として子供とのふれあいの中で感じてきたことをまとめてみたい。

子供とのふれあい

もともとボーイスカウト活動に拘わりを持ちはじめたのは、息子が小学校3年の時に、地域のスカウト団員の募集があり、男の子に集団で生活する経験を持たせようと早々に申込をした。ところが、スカウト活動は本人ばかりでなく、父兄が参加することが原則となっている。両親のどちらかがデンマザーかデンダットという役割をするのだ。スカウトとして独り立ちする前の段階にカブスカウト活動として4年間の訓練をするが、その活動を指導するリーダーの補佐役として面倒を見るのである。四街道のボーイスカウトは、当時、人口が2万あまりではあったが、なかなかスカウト活動がさかんで、団のメンバーは数十人がいた。隊舎もあり、大塚さんというしっかりした御大がいて全てを仕切り、そのもとで若いリーダーが熱心な活動をしていた。スカウトの組織は大きすぎていけないという規則があり、それにより四街道の団も分派することになった。新しい団は、ベッドタウンとして急に人口が増えた地域を中心にして設立された。組織もまた活動も充分固まっていないということで、大塚さんみずからが一人で奮闘して、四街道の第二団を引っ張った。こうして、新しい団が活動を始めたおり、隊のキャンプ場を整備することになり、楠岡さんと言う方の山を拓くことになった。子供のころ父と一緒に山に入り、下枝刈りを良くしていたので、これに父兄の協力隊として参加したと、是非、新しい隊のリーダーとしての参加を要望された。こうして、ボーイスカウトとの拘わりが次第に密接になり、その後、子供がボーイスカウトに上進した頃、副長として子供達と接するようになった。ところが、ある時、突然、隊長をしていた人が自己都合で渡米することになり、やむなく、自分が隊長を引き受ける羽目となってしまった。参加するようになった。スカウト活動に拘わるようになったいきさつは以上であるが、それからは、リーダーとして子供たちとの様々な体験、地区でのキャンプに始まり、県のキャンプ、さらには、日本ジャンボリー、国際親善としてのアメリカ・リバモア市との交

流など、いろいろなことを学び充実した活動ができたと思う。

ボーイスカウトの組織論

もともとボーイスカウトは、イギリスが発祥の地である。16世紀に南アフリカとのボーア戦争の際に、ベーデン・パウエル将軍は現地でのゲリラ活動に悩まされ、イギリス軍は非常に苦戦を強いられていた。その原因の一つは敵の情報が取れないことであった。このため、将軍はなんとかとして敵の動きを知る手段をとらせたのが、現地の子供たちを斥候として組織することであった。スカウトとは、「斥候」を意味している。すなわち、子供達に遊びとおなじような活動形態を取らせ、そのなかに情報活動をさせようというのである。平和な現代となつては、その必要はないが、スカウト活動の理念はこの斥候活動ということ念頭においておけば、非常に理にかなったものであり、また、現代の企業組織論に通用するものである。

スカウトの組織は、もっとも小さいグループは8人である。このメンバーは4段階に別れており、それぞれの段階に2人がいる。お互いに助け合うと同時に競い合うようになっている。リーダーとサブリーダーがいる。この二人を中心にして、実際の活動をするメンバーが4人いる。それぞれの持っている技能により役割が決まっている。残りの二人は新入りで、チームの中では見習いとして、いろいろな訓練を受ける。あらゆる活動をする時に、それぞれのメンバーは自分の責任分担をもつようになっている。

例えば、パトローリングと言うゲームがある。オリエンテーリングのようなものだが、これは、決められた指示に従い、地域をパトロールする。その間に、地域のいろいろなマークをチェックし、地図を作り、記録を残していく。後から来るグループに、道標の暗号を残していく。勿論、前のチームの情報も掴みながら、自分たちのノルマをはたしていくのであるが、この時、リーダーは、前のチームの暗号の探索と、コースとりを行う。サブリーダーは、グループの最後を受け持ち、石ころを並べ方角と距離などの情報を後のチームへ残す。この間、隊員は、周辺状況観察をし、これを記録に残す。見習いは、行進の間は、このグループのメンバーに囲まれ、安全を確保するといった具合である。全てにおいて、リーダーには、全員が活動できるような課題をつくるように指導する。

団には、こうした隊と呼ばれるグループを4つまでつくり、それが、一つの組みとなり、2つの組が一つの団となる。これ以上、肥大化した場合には、団を分けることに名けている。組織の肥大化は隊としての活動を停滞させ、まとまりがとれなくなるからだ。軍隊を擁護するわけではないが、一つの組織に活力をつけ、その活動を充実させるためには、この組織は非常によく考えられていると思う。常に、スペアを用意し、それぞれのメンバーに責任と義務を課し、メンバーの能力開発を自分たちで達成させ、これを実際の活動で確認できるようにしてある。組織ばかりでなく、後で述べる活動の内容とも合わせ考えると、このやり方は現代でも通用するチームとしてのレベルを向上させると

いうもっとも的確な方法ではないかと思う。

技能訓練

ボーイスカウトでは、子供たちの経験に従い明確にそのレベルを分けている。一級スカウト、二級スカウト、見習いスカウトに別れる。それぞれにスカウトには組織の中での目標と課題が課せられており、これを日々の活動のなかでクリアーしていく。また、個人的にはスキルアップをすべき技能が30項目近く設定されており、それぞれがスカウトのレベルに応じて持っている。上級スカウトに進むには、それぞれの必須項目と決められた数の選択科目を習得しなければならない。例えば、活動の基本となるキャンプ生活の中では、テントの張り方、料理の仕方、救護法、オリエンテーリング、自然観察、通信、ロープワーク、工作等を、ある時は、訓練のなかで、また、ある時はゲームのなかで身につけていく。

こうした技能を身につけ、活動の実績を評価されると県の連盟から、菊スカウトの称号が与えられる。ボーイスカウトでこれを取ると立派なものだ。さらに、その上の技能を習得したものに与えられる、隼スカウトとか、富士スカウトになると大人以上の技能と精神力を持ったスカウトとなる。富士スカウトの場合には、毎年厳しい審査をうけて、各都道府県から2～3名程度のものしか認められない。かれらは、通常の団活動の中で積極的な活動をし、一流の技能を身につけたうえに、特定の研究課題を設定して、この論文を提出し、審査をうける。内容によっては専門家の論文にも負けない様なものである。見事に富士スカウトと認められると、日本連盟の名誉総裁である皇太子殿下の招待で赤坂離宮での昼餐会に呼ばれる。まことに名誉なことだ。だから、各団にとっては一丸となって富士スカウトの育成をする。一人のスカウトの力ではどうにもならず、団全体の活動が活発でなければ富士スカウトは生まれえない。私の参加した団も生まれたばかりの団であるので、到底富士スカウトを生むような素地はなかった。しかし、目標を設定して、時間をかけて団の雰囲気をつくること、伝統をつくることをこころがけ、まず、菊スカウトの育成からはじめた。といっても、闇雲にやって取れるものではない。初級スカウト時代からの積み重ねが記録として審査され、その都度の技能レベルがチェックされるようになっていく。入ってきたばかりのスカウト、一人一人に長期的なプログラムが必要になる。こつこつと活動を積み重ね、4年間あるスカウト活動のなかで課題をクリアーしていく。こうして、何名かの菊スカウトが毎年誕生するようになると、次にその上のレベルのスカウトを育成するプログラムが見えてくる。まさに、5年、10年の長期的計画でスカウトとリーダーが一緒になって団の活性化を計っていくのである。、仕事の都合で団の活動現場からリタイアしてしばらく後に、我が団から富士スカウトが生まれた。これはスカウトのみならず、団のリーダーとしても自慢できることで、まさに指導者冥利につきるものであった。

この富士スカウトになることがスカウト活動の大目標であるが、このために用意された活動プログラムはまことに壮大なものだ。まず、スカウト活動は、4年に一度の世界ジャンボリーがある。これには、一級スカウトしか参加できない。一級スカウトになるためには少なくとも3年はかかるので、一生懸命、スカウト活動をやって、4年目で初めて世界ジャンボリーに行けることになる。世界ジャンボリーの前年には、日本ジャンボリーがある。これも4年に一度だ。原則として2級以上のスカウトが参加する。全国から、だいたい数万人のスカウトならびにリーダーが集まる。地方にいくと人口4万人くらいの市があるから、一つの市の人口位のひとが開催地にわんさかと来る。バスで一度に来ると交通マヒどころではない。地元のひとの生活基盤が失われる危険すらある。だから、バスの到着時間を割り振って集合させる。キャンプサイトには、10,000近くの色とりどりのテントが張られる。壮観なものだ。開会式には必ず、皇太子殿下出席する。かつて、昭和天皇が皇太子の時にイギリスを訪問し、その折、閲兵式に参加したボーイスカウトのりりしい態度を見て、こうした組織が日本にも是非作ってほしいと述べられたところから、日本のボーイスカウトが発祥し、以来、皇太子殿下が連盟の名誉総裁になっているからだそうだ。開会式に来られても、数万人もいるキャンプ場では、おいそれと、開会式場にも入れない。殿下の挨拶を耳にするのは至難のことである。

この日本ジャンボリーの前年には、各県単位のキャンボリーが開催される。これでもなかなか壮観なもので数千人のスカウトが集まり、普段交流のないスカウトが共同でさまざまなプログラムに参加する。さらに、その前年には、地区でのキャンボリーが実施される。それぞれのキャンプでは、その規模に応じて目標と課題の設定がおこなわれ、こうした課題を着実に消化していかないと、最終目標の富士スカウトにたどり着けないのだ。

毎年、開かれるこうしたキャンプのために、各団では、毎月一度の全体活動をする。夏のキャンプに向けて、年に数回の訓練キャンプをする。冬はスキーか又はスケートの訓練、耐寒マラソン、年末の募金活動は町中での奉仕活動を身をもって体験する。また、この時期に、オーバーナイトハイキングという一晩かけて数十キロのオリエンテーリングを行う。房総半島を横断する位の距離を徹夜で歩く。一晩中歩き、明け方九十九里の海岸につき水平線の登ってくるご来光は一度に疲れを吹き飛ばすほど希望と勇気を与えてくれる。大人でもなかなかきついハイキングであるが、これを一度体験すると一気にスカウトが成長する。それほど真剣に取り組まないとクリアできないのだ。春になると、サイクリングをする。3泊4日で、利根川の源流から霞ヶ浦までのロードサイクリングをしながら、地域での文化を調べたり、川原で自炊をする。ながい道中には、自転車がパンクする。これを自分達で修理するのも訓練のうちだ。スカウトに課せられた課題のなかに自転車賞というのがあり、自転車の構造、乗り方、交通ルール、故障の修理などを習得しなければならない。子供は自転車が好きなので、直ぐに立派な技能を身につける。夏が近づくと、キャンプに向けての訓練が始まる。その一つが鶏の

捌きだ。これは、本職の人をよんで見よう見真似で数人で一匹ずつ捌く。最近の子供にとっては、生身の鶏にさわることすら抵抗がある。いざというときには役にたつと分かっているけど、これには少々てこずる。見事に捌いても、その場を料理をするということになると、もう一遍に気分が悪くなり、その場に寝込んでしまう子供もでてくる。これを何とかなだめるのは、リーダーみずから、料理したものをおいしそうに食べなくてはならない。とにかく、子供の分まで嫌と言うほど料理がでてくる。毎年、これにはよほどの気合をいれてかからなくてはならない。

こうした団全体の活動が毎月一度計画されているので、その準備のために小人数にグループわけされたスカウトは、いろいろと準備をする。こんな具合で、スカウト活動のプログラムは、4年周期で実に見事に組み立てられている。大人でも飽きない。が、最近の子供は、塾通いが忙しい、ゲーム遊びのほうが楽しいとのことで、スカウト活動が停滞気味ときく。時代の流れがそうさせているのかもしれないが、とても寂しいことである。

教育の問題

国際親善

石灯籠のはなし

四街道市とアメリカ・リバモア市とは姉妹都市を結んでいる。毎年市民レベルでの交流施設が相互訪問をし、お互いの親善を深めていたが、リバモア市長を努めていたカメナさんがボーイスカウトのリーダーでもあったことから、ボーイスカウト同士の親善を計ったらどうかと言う話になった。そんなことから、1968年に四街道市のスカウトが親善訪問をすることになった。隊員数名とリーダー合わせ二十人程度の使節団が構成された。小生もその頃、スカウトのリーダーとして第一線で活動していたが、この国際親善は未永く継続する必要がある、そのためには長期的な観点でこの事業を推進する必要があると考えた。そのためには、自分の周りの条件を整えることが一番と思い、この第一回のメンバーには自分は参加せず、家内を行かせることとした。

大塚団長をはじめとして、女性三人の救護班を含めた使節団はリバモア市で盛大な歓迎を受けたとのこと。ことの次第は定かではないが、その感激のあまり、レセプションの席で四街道のボーイスカウトがリバモアのスカウトに「石灯籠」のプレゼントをするとの約束をしたらしい。リバモア市ではこの話が大きくなり、早速、「石灯籠」の受入準備委員会ができ、日本からのプレゼントの到着を今か今かと首を長くしていると言う話になった。

ところが、日本から言った使節団では、誰もそんな話をした人はいないし、たとえそのような石灯籠の話が出たとしてもプレゼントの約束は誰もしていない、ということだいたいへんなことになってしまった。使節団が訪問したときは四街道のボーイスカウトがまだ一つで大塚さんのもとでよくまとまっていたが、ちょうどこの頃分派のはなしとな

り、大塚さんが新規に発足した二団の団委員長になったことを幸いに一団のリーダーはこの話から降りてしまった。そんなわけで、このプレゼントの話は二団が引き継ぐこととなり、団委員長の責任上、何とかしなければ信用問題だということになった。当時、リバモア市との交流の橋渡しをしていたのはスカウトのリーダーであった伊藤氏とアメリカ在住の小沢氏であった。が、伊藤氏もことの重大さに対応しきれず、スカウトリーダーを途中で投げ出し、アメリカに移住してしまった。こまったのは団委員長である。それまで、何十年と私財を提供し、地区のボーイスカウト運動の活性化に尽力してきたのに、その見返りが国際的な信用問題となると、これは事が重大。何とかしなくてはということになった。「よし。それなら新規に結成をした二団のグループの結束のためにもなんとかしよう」と言うことになり、二団だけで石灯籠をリバモア市にプレゼントすることにした。

まず、石灯籠は筑波市にいき適当なものを手に入れてきた。当時の金で15万円くらいだったかと思う。この費用はリーダーが各人一万円ずつ寄付することにした。そのかわり、灯籠の記念プレートに名前を刻印することにした。これは、小生がドイツ風のアルファベットでデザインし、大理石の石に刻んでもらった。こうして、どうにかプレゼントする灯籠が手に入った。ところが、この石灯籠、本体の価格はたいしたことはないが、なにしろ重量が一トン以上もある。これを運ぶのがたいへん。まず、大塚さんと自宅までは、息子さんのトラックで運んで貰った。ここまでは大したことはなかったのだが、いざ、これを送るということになったら、アメリカまでの船の輸送賃が莫大だ。これはたまらないと、いうことで思い付いたのが、カリフォルニア・ワインを運んでくる船の返り便。これが空荷であるとのこと。早速、リバモアで船会社に掛け合い、只で運んでもらうことにした。こうした、知恵と度胸と機転はスカウトのお手の物。さあ、これでもう良いだろうと思ったら、今度は、どのように建立したらよいか分からない。建てに来てくれということになった。さあ、たいへん。日本から石大工を派遣することなんて、金と人もいない。とてもそんな訳にはいかない。でも、何とかしなくては。結果は明白。自分たちで建てに行くしかない。この当たりが団委員長の決断力と行動力の凄さ。早々に、梱包を時、自分の家の庭で石灯籠を建ててみることにした。自分たちで実際建てられるのか、その手順はどうしたら良いのか、リハーサルを始めたのだ。こうして、いよいよ、こちらから石灯籠を建てに行くことになった。メンバーは、団委員長と小沢さん二人しかいない。これでは、土台無理だ。そこで、当時、いなくなった伊藤氏の後がまでボーイ隊の隊長をしていた小生にお鉢が回ってきた。力仕事と新しい事への好奇心から、それに前回参加していなかったのも何かこのチャンスにと思い参加することにした。ただし、リーダーだけでいくには何とももったいない。折角の親善理活動の一環で始めた事であるので、是非、スカウトの子供も連れて行きたいと思い、団員を募集したところ小学6年生のスカウト数名が学期中ではあるが、親善使節として参加することになった。

こうして、10月30日からリバモアを訪問。こちらは、石灯籠を建てるのが目的であるが、こども達は親善使節であるので大はしゃぎである。何しろ、リバモアでの返りにはロスアンゼルスに立ち寄り、ディズニーランドを見学し、それから、メキシコ・ティワナまで足を延ばすことになっていた。

リバモア市に着くと、早速の歓迎パーティ。先方では、首を長くして待っていた日本からの石灯籠がやっとのことで建立されるということで、大変な騒ぎだ。場所は市役所前の公園の一角に日本庭園のコーナーを用意しているという。ここに、滞在中の三日間の間に建て、除幕式をするということになっていた。が、よくよく話を聞いてみると、ついでに竹の石灯籠がどこにもないのだ。さあ、たいへん、一体どこにあるのかと皆で手順を追ってみたら、オークランドの保税倉庫に受け取り主がないまま保管されているとのこと。これを貰いに行かなくてはならない。次の日、市からトレーラーを仕立てて貰い、団委員長と小沢さん、それにリバモア市役所の所員が引き取りにいった。何やかやと手続きがたいへんかと思いきや、保税倉庫の係官がボーイスカウトの出身で、敬礼一つで、なんなく引き取りを許可してくれたとのこと。おまけに、受け取りに言った二人は、超効果なビジネスバックを十ドル程度でちゃっかり購入して来ていた。小生には、お土産とあって、ドイツから輸入し、受取人がいないウサギの毛皮、数十枚を持ってきてくれた。これは、半分をリバモアのスカウトにプレゼントし、残りを日本のスカウトへの土産とした。石灯籠を受け取りに言っている間、スカウトは、現地の小学校に体験入学をさせることにした。小生がホームステイをしたライスさんの奥さんの友達が先生をしているということで、難なく、受入をしてくれた。何と運の良いことか、ちょうどこの日はハローウィンの日で、リバモア市あげてのお祭り。学校では、先生自らがいろいろな変装をし、また、生徒も思い思いの格好をして授業をしている。校長先生は、ドクロの格好で学校の中を動き回っている。スカウト一人一人には二人づつのエスコートがつき、きれいな女生徒に手をつながれ、しきりにはにかんでいる者もいたが、あとでその女性が実は男性の変装だったりで、大笑いをした。レストランに言っても、店員がドラキュラの顔をして注文を取りにくる。かの有名にリバモア・ローレンス研究所のなかでも、仮装大会をしていた。夕方、暗くなったら、今度は街の公園で日本でいうお化け屋敷が開かれて、皆が連れ添って度胸試しに出かける。子供達にとっては、いよいよこれからクライマックスである。夜が更け、辺りが静まりかかると今度は、皆で連れ立って、各家庭を訪問するのだ。昼間、かぼちゃをくり貫いて作った蠟燭立てが怪しく光っているところへ子供達が元気よくドアをノックする。すると、どこの家庭も中からキャンディーが山積みされた籠を持って、これを子供達にあげ、おとなしく返ってもらう。キャンディーがもらえないときには、家の中に入って荒らしまわるという設定だ。こうなると、まさに日本のお盆とおなじ。後日、リバモアのローカル新聞の記者から、今回の訪問のインタビューを受け、その意義と感想を求められたが、この時、日本のお盆の風習とそっくりだと言ったら、早速、それが朝刊の一面に大きく載った。

残すところ一日となった滞在の最後の日に、石灯籠の建立が始まった。小沢さんがしまから借りたフォークリフトを操り、団委員長と小生とで日本から持ち込んだ速乾性のコンクリートを練り、地震の無い国とは言え、安全のため鉄骨をいれて三段積みの灯籠を建てた。驚いたことに、アメリカの土地は、10センチも表面を削ると、もうその下は岩盤が出てくる。日本のように数十センチも掘り下げて、バラスを入れ、基礎を固める必要など全くない。後で聞いた話では、高速道路も、少しだけ土地を削り、あとは平らにして、アスファルトを流して固めるだけ。これだから、一日で数十メートルしか進まない日本の工事と違い、アメリカでは一週間もすれば十キロも二十キロも道が出来てしまうのだそうだ。勿論、立ち退きなんて必要ない。幾らでも土地は余っているのだから。我々が、汗水流している間、サンフランシスコや、近隣の名所を観光していたスカウトが返ってくるのを待つて無事、除幕式が済んだのは、既に秋の夕暮れがとっぷり漬かってから。無事、大任が果たせ其の日のパーティーの楽しかったこと。ドクターをしているという市のリーダーの家でのホームパーティーであったが、途轍もなく大きな家で、スカウトも含め、数十人が集まり大盛況であった。

こうして、石灯籠が立派に建ち、皆で感慨にふけりながら、それまでの苦労を思い出し、お互いに交流を深めた。リバモア市では、ボーイスカウトのプレゼントではなく市として受け入れるつもりで作った委員会の責任者は、グリーンさんといい、ローレンス研究所でもかなりの著名人で、海外出張に連峰政府の許可がいるほどの人で、今回の役も名誉職的に選ばれたとのこと。だから、人一倍石灯籠の建立に思いが深く、なかなか届かないプレゼントにとっても気を揉んでいた様子。なのに日本の方では、スカウトの行事くらいで、いつでもできる位のつもりでいたから、たいへんな行き違いとなり、笑いながら歓談のなかにもグリーンさんの発言には、随分きついものがあった。